

第十二回広島芸術学会大会報告

金 田 晉

一九九八年七月三十一日（金）から八月二日（土）にかけて、第

十二回広島芸術学会大会が開催された。第一日と第二日は広島県立

美術館が、第三日はふくやま美術館が会場であった。なお、今大会

は、四年前につづいて日韓美学研究会の大会と共同で、運営がすす

められた。四年前の日韓美学学生研究会は、美学研究者による「研

究会」へと成長していた。また今回の大会には、中国やアメリカの

美学研究者も参加した。広島芸術学会の年次大会の、形式内容の両

面での一貫性を守りながら、国家の枠を超えて東アジアにひろがる

大会とするために、プログラムに工夫を凝らした。

研究発表の部は全国からの公募論文六篇からなる。

第一日

ポロフスキと原民喜 ウルシュラ・ステイチェック（広島大学）

フィードラーの「感性的認識論」の可能性 石原みどり（大阪大学）

韓国最初の女性西洋画家羅惠錫について

久保田貴美子（比治山大学）

ステイチェック氏は、ポーランド出身で、広島大学大学院で比較文学を研究する女性で、アウシュヴィツ収容所の体験を書き続け自殺したポーランド文学者ポロフスキと、原爆下の広島で書き続け同じく自殺した文学者原民喜の作品を「不安文学」という観点から、体験と創作の問題として考察しようとした。

石原氏は、現代芸術学の祖フィードラーの現代的意義を再考しようとした。フィードラーはふつう快不快の法則を研究する美学と訣別して、真理認識の研究としての芸術研究の道を切り開いたとして高く評価されるのであるが、しかしこれは今日「美学」と訳されているエステイクを、本来の語義「感性的認識」論、あるいは感性論に立ち戻させるものでもあった。これは、感性論の再興をはかる

現代美学の方向性と合致し、エステティクをフィードバックに即して再検討しようとするものであった。

久保田氏の発表は、今大会が日韓美学研究会との連携を図りつつ行われることを意識したもので、近年韓国でもフェミニズムの観点から再評価されつつある羅惠錫をとりあげ、豊富なスライド資料を駆使して行われた。

第二日

ウォルター・ペイターにおける「芸術としての人生」

崔朱延（韓国・嶺南大学）

理想的悲劇—アリストテレスの『詩学』の第十三章と第十四章より—

渡辺浩司（大阪大学）

近世初期風俗画の源流としての酒飯論絵巻

並木誠士（京都工芸繊維大学）

崔氏は、十九世紀末イギリスの美学者ペイターについて、その「芸術としての人生」の理想を、著作を丹念に読み解きながら、ワイルド等の弟子たちの歪曲された唯美主義の誤解の殻を破って、解明しようとした。

渡辺氏は、アリストテレスの『詩学』において示されるアリストテレス自身の悲劇評価をきわめて精細に読解し、アリストテレスが

下したアイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスの三大悲劇詩人の評価と解釈を通じて、理想的作品とは何かを探って行く。

並木氏の発表は、風俗画の起源に関する従来の二つの説、絵巻物の画中の典型表現の点景であったものが発展したという説と洛中洛外図が分化して生まれたという説とは別に、もう一つの源流として室町時代以来盛んに描かれた酒飯論絵巻のあることを指摘し、そこから風俗画の起源を解き明かそうとするものであった。

いずれも、日本の美学界の中堅、若手の研究者による、きわめて先鋭な問題意識の研究発表であった。

また第二日の研究発表とシンポジウムの合間に、中畝みのり氏の伴奏で韓国人舞踊家金映延氏の見事な創作舞踊があり、会場から盛んな拍手を受けた。これも日韓の美学研究者の連携を盛り上げるための試みであった。

第二日の掉尾を飾ったのは、共同シンポジウムであった。以下は広島芸術学会会報第四十九号に掲載した要約を転載する。

共同シンポジウム「遊びの美意識」（司会：金田晉（広島大学）、基調報告：浜下昌宏（神戸女学院大学）、パネリスト：俞俊英（韓国・梨花女子大学）、三浦信一郎（帝塚山学院大学）、樋口聡（広島大学）、伊東敏光（広島市立大学）、通訳：関周植（韓国・嶺南大学）

カントは美的趣味判断の第一の特徴として「無関心性」をあげた。花を見て、鳥や風や月を見て人は美しいと思う。それを「無関心」とはどういうことか。無関心とは英語の uninterested の訳語からも推測できるように、利害をからめない、功利的に対象を見ない、という意味につながる。そしてこの無関心は遊びの本質につながる。

ホモ・サピエンス（知る人）やホモ・ファベル（作る人）の向こうを張って、ホモ・ルーデンス（遊ぶ人）を人間の根本的あり方であると、ホイジンガは長く「暗黒の時代」と烙印を押されつつづけてきたヨーロッパ中世期の人間の生活模様を読み説きながら、提言した。以来ロジェ・カイヨワやフィンクのように、遊びは文化論としてもっとも人気のあるテーマの一つとなった。

その遊びを概念としてでなく、人々の現に行っている活動としてとらえてみたいという思いが今回のシンポジウムの原点であった。パネリストは日本と韓国の、いずれも手練の美学者たちであった。

浜下昌宏氏の基調報告「遊びの美意識」では、70年代日本のレジャー文化への批判をもとに、本来の遊びとは何かを学説史的に説き、従来のヨーロッパ美学に依拠してきた日本美学に対して、「寒山拾得」の精神を貫く自由、風流、さらに風狂を遊ぶもう一つの美学を提出し、東洋と西洋の比較美学を試みた。

パネル・ディスカッションに移って、まず俞俊英氏（韓国・梨花女子大学）は、孔子、老荘にはじまる中国美学、芭蕉、蕪村に代表

される日本近世の美意識の伝統を整理し、韓国の現代的な美意識を論ずるなど、東アジア美学の全面的展開を行った。

三浦信一郎氏は、「遊ぶ」と普通に訳される play（英）や spielen（独）がまた楽器を「演奏する」意味でもあることを取り上げ、「音楽演奏における美意識」という題で、ヴィヴァルディの「四季」やベートーヴェンの「第5交響曲」やラヴェルの「ボレロ」等の諸指揮者による演奏のちがいを例に引き、演奏に働く美意識を語った。

樋口聡氏は「〈遊び〉と〈美〉をめぐる議論について」という題で、遊戯論の落とし穴として「活動としての遊戯」と「存在原理としての遊戯」の混乱を指摘し、しかもそれを分けることの困難を、シラーの美的教育論における遊戯論や辻惟雄の日本近世美術論をとりあげて論じた。

伊東敏光氏は彫刻家として制作に行き詰まっていたとき、身近に転がる石を拾い蟬殻を拾い集める遊びを通して、自分の創作の主題を見出していったみずからの歩んだ道を語りながら、創作行為の中にある遊びという要素の本質性を語った。

いずれも、この日のためにずいぶん準備をされてこられた委曲をつくした報告であった。そのために、問題の広がりや充分理解できた半面、限られた時間に制約され、パネリスト同士、会場との応答の時間が充分に取れなかったことが惜しまれた。

講堂は満員で、一生懸命に聴講してくださった参加者に感謝して

いる。

第三日

舞台をふくやま美術館に移して、広島芸術学会と日韓美学研究会の共同企画の講演会と見学旅行を行った。

講演 芸術文化交流の観点からみた朝鮮通信使

小島基（広島大学）

二十一世紀の日韓プリントアートの交流について

金泰樹（韓国・アートディーラー）

見学会はふくやま美術館と歴史博物館で、それぞれの館の学芸員の解説を受けながら、盛会裡に行われた。晴天であったことも、会を盛り上げることの一助となった。

広島芸術学会は着実に、今日の芸術学、美学の状況に対して思索し、発言する組織体になりつつある。全国の、さらには東アジアの研究者が7月末から8月はじめに広島で顔を合わせることが次第に定着してきていることも心強いかぎりである。

（かなた・すすむ 広島大学）